



タロコ国立公園

奇來連峰(写真/梁大猷)

沿革

タロコ峡谷は日本統治時代中1927年に台湾八景に選ばれた。1937年には、霧社、雪山、谷關及び立霧溪流域を含む27万ヘクタールが正式に「次高タロコ国立公園」として指定されたが、太平洋戦争の勃発により計画は中断。



タロコ峡谷(写真/廖朝山)

戦後1982年5月6日行政院は「観光資源開発計画」を定め、内政部營建署にタロコ国立公園に関する調査計画を指示、区域指定が審議され、1984年4月5日行政院第1877回審議にて全案通過、同5月20日公布。その後、数回に及び審議と各関係機関との交渉に

加え、立霧溪水力発電計画及び崇徳工業地帯は国立公園内に設置されることは好ましくないとの各界の同意を得、1986年10月9日行政院第2003回審議にて全案通過、11月28日に管理處を設置。1988年5月20日タロコ国立公園警察設置。

概況

タロコ国立公園は緑豊かな山々と清らかな水に恵まれ、変化に富んだ景観を誇っている。台湾の東部に位置し、東は太平洋、西は雪山山脈に接しており、区域内には台湾百岳に名を連ねる山が中央尖山、奇來連峰、南湖群峰を筆頭に二十七座あり、世界に誇るタロコ峡谷、壮大な清水断崖、立霧溪、陶塞溪、砂卡礑溪等が美しい景観を呈している。



高山の美(写真/安世中)

立霧溪の河口から区域内最高峰南湖大山の頂上までの標高差は3740mに達し、東北から吹く季節風の影響もあって、気温、気候の変化が著しく、中部横貫道路に沿って上っていくと、一日の内に、四季の変化を肌で感じることができる。変化に富んだ地形や雲海、夕焼け、日の入り、日の出、雪景色などが行く人の目を捉えて離さない。



タカサゴマシコ(写真/林美典)

豊かな環境は豊かな生命を育んでいる。亜熱帯から熱帯にかけての植物相が見られ、1224種の維束植物、132種の希少植物が生息を確認されており、中でも高山、石灰岩地域の植物は最も特徴があるとして、多様な植物相は同時に動物の格好の生息地でもあり、哺乳類31種、鳥類144種、両棲類13種、爬虫類28種、溪流動物16種、昆虫類900種以上、蛾類353種、蝶類302種が観察されている。

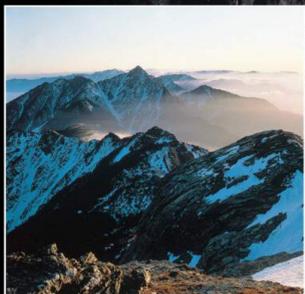


白腹鷓鴣(写真/蔡朝生)

人間も自然界の一員として、このタロコの地で時代を異にし、様々な集団が世を越えて、生存を懸けて戦い、足跡を残している。大自然の中で古人を想い、タロコの絶えることのない生命の尊さを探索してみてもどうだろうか……。

高山の美

高い山々と深い谷はタロコ国立公園が誇る地形景観で、区域内は地勢が険しく、西から東へ少しずつ低くなり山が連なっている。2000mを越す山地面積が全体の半分を占め、そのうち六分の一近くが3000m級の山に当たり、「台湾百岳」に名を連ねる山が27座ある。中でも南湖大山、奇來連峰、中央尖山などは特に有名で、南湖大山一帯は景観だけでなく非常に特徴のある生態を有する。



中央尖山(写真/謝恩男)

南湖大山は標高3742mとタロコ国立公園内では最も高く、地質は砂岩、石灰岩の薄い層を挟んだ第三紀に形成された粘板岩、珪質粘板岩が主で、土壌層は薄く、一部は岩屑からなる。調査によって南湖一帯には氷河が残したものと見られるカール、氷帽、U型谷が確認されている。年間降水量は3400mmを超え、年間を通して気温が低く、一年の内四ヶ月以上氷に閉ざされる。この一帯の気候を形容する言葉としてよく「風が強く、雨が多く、霧が濃くて霜、雪が多い」が使われる。



タイワン山(写真/林漢輝)

南湖カールの厳しい環境にはその寒さに適応した独特の生態が息づいている。40種類の稀少植物が確認されており、中でもタイリンアカバナは珍しい。夏は南湖山一帯に花が咲き乱れ、虫や鳥などの動物の活動が最も活発になる季節。この一帯の美しくも繊細な自然、生態は台湾の宝とも言うべきもので大切にしていかなければならない。

文化と歴史

人類はいつごろ立霧溪流域に入ってきたのだろう。今までの調査で、今から約二千年前に麒麟文化と卑南文化の特徴を持った一群が立霧溪河口に住んでいたことがわかっている(當世遺跡)。それがタロコの最初の住民と考えられ、その後、約二千年前には印紋土器を使用していた普洛灣型十三行文化人が立霧溪の中流と下流一帯に暮らしていたと見られ、布洛灣、西拉岸、巴達暹、椰園、竹村、西貢などで遺跡が見つかる。

約二、三百年前、濁水溪上流に暮らしていたタロコ族東セデック群のタルコ人とタウサイ人が山を越えて東側の立霧溪流域に移動、陶塞溪上流、中流地域に定住した。これらは1914年のタロコ事件並びに1930年の霧社事件後、日本当局に管理上の便宜から山を降りて低海拔地域に住むことを余儀なくされるまで続いた。現在集落跡が79箇所確認されている。



集落跡(写真/張景山)

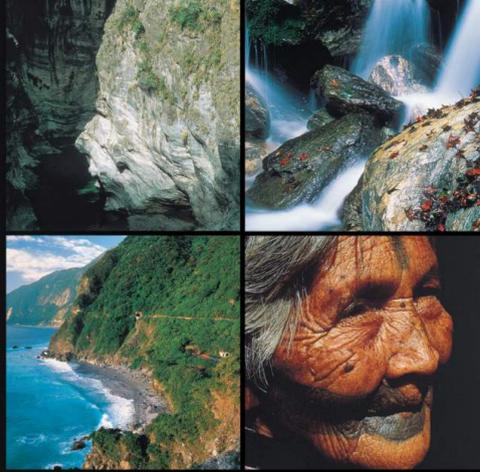
伝統ではタロコ族は男性は戦いに強く、女性には機織が上手であることが要求された。家は父親から息子へと受け継がれ、結婚すると別荘に世帯を構える。集落は祖靈崇拜を主とするgaya(共祭集団)から成り、焼畑農業を中心に狩猟、採集、漁労で暮らしていた。かつては顔に墨を塗る習俗があったが、日本統治時代に禁止された。入園はタロコ族の伝統上、非常に特別な意味を持つもので、部族の識別、成人の証、見た目の美しさなどの意義の他に、死後祖靈の地に帰る際にはなくてはならないものとされていた。

タロコの表情豊かな石は億万年の大地の形成のドラマを語り

タロコを滔々と流れる水は数百万年谷を彫り山を削って時を刻み

遅しく不屈なタロコの人達は先人の血と涙の歴史を語り継ぐ

タロコの山も水も万物栄枯の法則を忠実に繰り返しつつ百万年の歳月を春を迎え秋を過ごしてきたその美しさは言葉で表すまでもない



左上:インディアン人の顔(写真/張景山) 右上:清水断崖(写真/蔡朝生) 右下:タロコ人の老人(写真/謝恩男)

清水断崖

かつて台湾八景の一つに挙げられた清水断崖は、タロコ国立公園で唯一海に面した地域である。ここは断崖海岸で、片麻岩、大理石、緑色岩から成っている。これらの岩は崩れにくい上に波による激しい浸食を受けて、高さ1000mを越す、ほぼ垂直の断崖が形成された。これは世界でも珍しい地形で、東台湾の海岸線に20kmに渡って続いている。

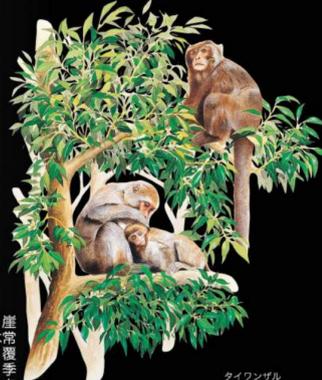


清水断崖(写真/林漢輝)

清水断崖

清水断崖一帯の渓谷は常緑広葉林に覆われており、季節風の影響を受けて夏と冬の雨量に若干開きがあることから、ここは「亜熱帯雨林植物帯(Ficus-Machilus Zone)」にあたる植生が見られる。板根、支柱根、幹生果、蔓性植物、絞め殺し植物など高温多湿の環境に適した特徴を持った種が多く、よく見られるオオバタバ、ガジュマル、アコウは榕樹林帯(Ficus-Machilus Zone)の指標植物である。

断崖に貼りつくように造られた道路は、最も古いものでは1874年に羅大春が指揮して開いた北路が国立公園内で、最初に政府によって造られた対外連絡道路になる。1927年に日本当局が自動車道路工事を着手、五年後の1932年に開通、「臨海道路」と呼ばれた。戦後「蘇花公路」と改名。険しい清水断崖の下は波が打ちつける太平洋で、断崖と海の間をカーブを切って走る道路の眺めは絶品。



タイワンザル

タロコ峡谷

約四、五百万年前、フィリピンプレートに属するルソン弧とユーラシアプレートの衝突によりユーラシアプレート上の堆積物が圧縮、隆起して山脈が形成され、台湾が徐々に姿を現した。数千万年にわたって、台湾史上最も古い大理石地層を削り続ける立霧溪の水と、今も続いている地殻の隆起と風化侵食が、美しいタロコをつくりあげた。



モルトレイトアオガエル

タロコ峡谷ではその特異な地質構造から土壌が発達しにくく、乾きやすいために、主に陽性の乾燥に強い岩生植物が多く、頻りに地表が変化するためにいる岩生植物が生え、遷移を繰り返すので安定して植物群落を形成するに至らない。痩せた養分の貧しい土壌でも育つ岩生植物は非常に適応力が強く、こうした峡谷の植物は種子の散布に、クヌシハカエデ、タイワンダンテックなどは風、クワ科イチジク属の植物、ガマズミなどは鳥、太魯閣樹の果実は齧歯類の動物の助けを借りるなどして、強靱な生命力を駆使して生きている。

タロコ峡谷を通る中部横貫公路は手作業で岩を削って開いた道路として知られている。1956年7月7日着工、連日五、六千人を動員し、台風や地震、豪雨の危険に曝されながら、死傷者の続出、機材の破損を乗り越えて、建設工費四億二千万円、三年九月と十八日の工期を費やして、ようやく1960年5月9日全線開通した。今日タロコ峡谷の美しい自然に触れることができるのは、この血と涙の結晶ともいえる道路があったことだといえる。



タロコ峡谷(写真/安世中)



窟に包まれた森(写真/安世中)

碧緑神木

海拔約2000mにある碧緑神木一帯は片岩、千枚岩を主とした扇状地、断崖が見られる。關原、卡拉實は典型的な扇状地である。

碧緑神木とは樹齢3200年のランダイスキの大木のごとで、このあたりは、冷、温帯の境界付近に見られる針葉樹と広葉樹の混生林が広がっており、地形と気候の影響から、しばしば雲や霧に覆われる。鬱蒼と茂った林にはニイタカトウヒ、タイワンツグなどの針葉樹の他に、オメガカエデ、タカサゴリカエデ、タイワンヤマモミジなどの分佈が見られ、秋の終わりに冬にかけて紅葉が美しい。

またここは林木の種類が多いことから、野生動物にとって食べ物豊富な隠蔽性の高い良好な棲息地となっており、タイワンカモンカ、キョウ、イノシシ、タイワンザル、リスなど大小の哺乳類が出産し、キジ科、チメドリ科、シジュウカラ科などの鳥たちの活動も見られ、野生動物の楽園になっている。

合歡山

合歡群峰は中央山脈の主線線の分岐点にあり、連なる単面山が独特の地形を形成している。この地域は閩南系と立霧溪を登ってきた気流が水分をもち、夏に豊富な雨、冬には雪を降らせるために、雲海、雪景色などの気象景観が生まれる。合歡山地域の年間雨量は3400ミリ、平均気温5.3℃。地質は中新生のもので粘板岩、千枚岩から成る。合歡群峰は立霧溪、大甲溪、濁水溪の発源地でもあり重要な集水区である。

合歡山一帯を代表する植帯としてニイタカドマツとニイタカヤダケがあげられる。両者は競争しながら世代交代を繰り返している。毎年雪が融け、梅雨が過ぎると、ニイタカヤダケが濃い緑を呈し、六月から九月にかけて山一面に高山植物の花を咲かせる。秋が深まるにつれ、草木は枯れ、ニイタカドマツだけが蒼く残り、雪が舞う季節にも、銀色の雪に埋もれることなく生き生きと緑をたたえている。

冬が過ぎ春になると合歡山は生命の喜びを奏で始める。ニイタカヤダケの草原にはアリ科やヨコバイ科の昆虫の姿が見られ、その生長と分佈はニイタカヤダケの生長によって移動する。イワヒバリ、キンバネホイビイ、タカサゴマシコ等の鳥は草原または森林限界一帯でよく見られ、草原や雑地では台湾姫蜂、雪山車斯それにサンショウウオ等が生息している。チョウセンイタチは合歡山一帯によく姿を見せる哺乳類で、キチハチナズミやタイワンモリスミなどを主に食べる。自然の植物連鎖の循環がここでも伺える。

1914年から1935年にかけて、日本当局は戦争、統治、登山などの需要から、合歡越嶺道路を敷設し、たつて修復した。タロコから霧社まで、徒歩で四日間要した。この古道は合歡山地域を走り、四千口と四ヶ所には警察の駐在所が設けられ、合歡山地域では合歡山(現在の昆陽)、石門(現在の合歡山莊)、合歡(現在の落窪山莊)の三箇所に駐在所があった。また、現在雪地訓練センターが建っているところは、1914年にタロコ事件の際に佐久間左馬次郎が西軍を率いて集結駐留したところでもある。



ジャコフネコ

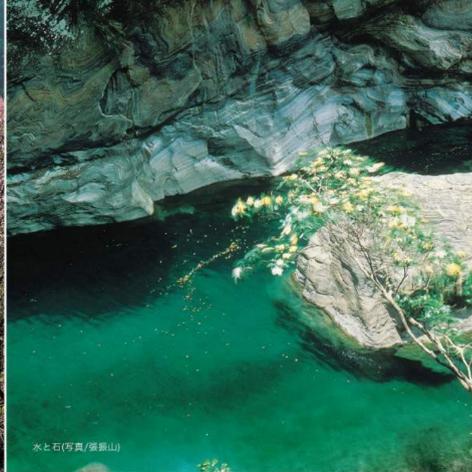


合歡山(写真/林漢輝)



タイリンアカバナ

タロコ峡谷(写真/莊朝興)



遊歩道

景観スポット区間距離 花 2.6km → 太魯閣 2.3km → 長春祠 0.9km → 布洛灣 1.4km → 燕子口 0.4km → 新折橋 3.4km → 九曲洞 2.2km → 慈母橋 1.3km → 綠水 2km → 天祥 2.5km → 文山 2.6km → 短尾橋 2.7km → 西貢 7.4km → 洛韶 11.6km → 新白楊 9.2km → 慈恩 5.3km → 碧綠神木 10.9km → 關原 4.8km → 大風洞 2.8km → 梨山 2.8km → 合歡山 4.34km → 社 4.34km

◆**蘇花下海遊歩道(165m、320m)**
和仁から太魯閣までの全長19kmの海岸。和仁(台9号線168.8K地点)、崇徳トンネル北口(台9号線176.4K地点)に遊歩道がある。清水断崖と太平洋が一望できる。海岸の植物や礁石を観察しながら、徒歩片道約20分のコース。



清水断崖(写真/呉志強)

◆**砂卡礑遊歩道(4.5km)**
元「神秘歩道」。入り口は砂卡礑橋から階段を下りたところ。大理石の岩壁に沿った小道。三間屋まで徒歩2.5時間のコース。砂卡礑溪の水は一年中透き通ったブルーで、水と石が織り成す景観が見事。砂卡礑渓谷は多様な動植物が息づき、途中Swigi(五間屋)とBerlayau(三間屋)はかつてタロコ人の暮らしていた場所で、その生活文化を垣間見ることができる。



砂卡礑渓谷(写真/林茂雄)

◆**長春祠遊歩道(1.9km)**
切り立った険しいコースで、禅光寺から吊り橋を渡って階段を上り、鐘楼から旧長春橋まで、徒歩約一時間。寺、記念碑、吊り橋、溪流、森、洞穴、湧き水など自然と文化に触れ、高台からは周囲の山と川を一望することができる。沿道の観音洞、長春祠、旧長春橋、中部横貫公路開拓の碑文などからは、当時の作業の苦労がしのばれる。



長春祠(写真/游登良)

◆**九曲洞遊歩道(1.9km)**
九曲洞トンネル脇。歩行時間約30分。大理石峡谷の最も見事なエリアのひとつで、タロコ峡谷の自然と生態の観察に最適なスポット。



九曲洞(写真/安世中)

◆**緑水遊歩道(1.97km)**
合歡越嶺古道の一部で、国立公園内で最初に整備されたガイドなしでも入れる古道。歩行時間約一時間。途中小さな橋がかかった小川、林の木陰、洞窟、古道、絶壁、岩生植物など解説ボードを見ながらのんびり散策できる。



緑水遊歩道(写真/張振山)

◆**白楊遊歩道(1.8km)**
天祥から西へ約500m、左側のトンネルが起点。全長380mのトンネルを抜け、瓦黒雨溪、搭次基里溪に沿って白楊の滝まで徒歩約1.5時間。沿路大理石と片岩が交互に混ざった地層、峡谷、滝、深流、動物、パイオニア植物の生態などが見られる。



白楊の滝(写真/張振山)



◆**蓮花池遊歩道(1.6km+2.1km)**
中部横貫公路163.4キロ地点廻頭橋から溪流吊り橋に沿って徒歩30分ほどで九梅吊り橋に出る。吊り橋を渡ると「之」字型に続く険しい坂を約1.5時間ほど上ると蓮花池に到着。蓮花池は海拔約1200mのところであり、国立公園内唯一の天然湖で、昔「天潭」と呼ばれていた。タロコ人蘇瓦沙魯集落の跡地。この地域は動物が多く棲息、野生動物の楽園になっている。



蓮花池(写真/安世中)

◆**豁然亭(1.97km)**
豁然亭は中部横貫公路160.2キロ地点にある。下に天祥と周囲の山が一望できる。豁然亭から天祥まで直線距離は約1.9km、600mの標高差があり、遊歩道は複雑に沿って急な下りを約1.5時間下りるコース。一部で崩落のため、現在は天祥青年活動センターから見晴らし台までの約800mのみ開放。見晴らし台からは眼下に白濁の滝や周囲の山が見下ろせる。



豁然亭(写真/安世中)

◆**石門山遊歩道(1.8km)**
台14号甲線33.5キロ地点に登山口がある。徒歩約30分で台湾百岳の一つである山頂に到着する。山頂からの見晴らしは素晴らしい、奇岩連峰、合歡群峰、南湖群峰、搭次基里溪が一望でき、合歡山の植物観察にも恰好のコース。



石門山から眺めた三角山(写真/高瑋瑩)

- #### 安全のためのお願い
- 中部横貫公路は平地から高山まで標高差が大きいので、気温の変化も大きくなります。中、高海拔区域に行くときは、防寒着をご用意ください。また、新白楊から関原にかけての区域は霧が発生しやすいので注意が必要です。
 - 中部横貫公路沿線や園内の遊歩道は、豪雨や地震の後の一週間は落石の危険があるので注意が必要です。
 - 小さい落石は大規模な崩落の前兆の場合があります。速やかにその場を離れ、周囲の人に警告してください。落石に遭遇、または落石の音がしても避難できない時は、山壁側に身を寄せ、腕で頭部を保護し、しゃがんでください。
 - 標高が700mを超えると空気が薄くなり、気圧が下がります。息切れ、脈拍が乱れたり速くなる、頭痛、倦怠感、嘔吐などの「高山症」の病状が現れた場合は、速やかに高度を下げ、改善が見られないときはすぐ病院に行ってください。
 - 野生動物に出会った時は近づかないでください。驚かしたり食べ物を与えたりしないでください。
 - 夏と秋には毒蛇が出たり、蜂が攻撃的になったりするの注意が必要です。
 - 小さな火が山火事を招くこともあります。火の使用には注意してください。
 - 高山地域に入るには、本格的な登山装備、入山許可証、生態保護地域入山許可証、資格を持った高山ガイドの同行が必要です。許可証の申請等については、国立公園管理處保育研究課(03)8621100#701、702にお問い合わせください。
 - 美しいところは危険が潜んでいます。常に自身と同行者の安全に注意してください。環境維持のマナー及び国立公園法、各種禁止事項を守ってください。

- #### 禁止事項
- 国立公園法第13条により、国立公園内では次の行為が禁止されています。
- 草木を燃やしたり、火をつけて整地すること。
 - 動物や魚類を捕獲すること。
 - 水や空気を汚染すること。
 - 植物を採取、破壊すること。
 - 樹木や岩石、表示パネルに落書きをすること。
 - ゴミを捨てること。
 - 規定範囲外の地域に車で入ること。
 - その他、国立公園の関係機関が定めた禁止事項。

連絡先

タロコ国立公園管理處 (03)8621100-6
 布洛灣管理ステーション (03)8612528
 緑水地質ステーション (03)8691129
 天祥管理ステーション (03)8691162
 合歡山管理ステーション (04)25991195
 タロコ国立公園警察 (03)8621406-6
 (文山小隊) (03)8691202
 (合歡小隊) (04)25991191

E-mail: tarokop@taroko.gov.tw
 ホームページ: http://www.taroko.gov.tw



ミミジロチドリ(写真/林茂雄)



タロコチドリ(写真/彭登全)



タロコチドリ(写真/彭登全)



タロコチドリ(写真/林茂雄)



ニホンカシカガエル(写真/潘建宏)



シカユツツシ(写真/呂嘉山)